

---

# 氷姫

淡緑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷姫

### 【Zコード】

N9113Z

### 【作者名】

淡緑

### 【あらすじ】

人口僅か130人の須農町の一角に聳え立つ冬狼神社に決して溶ける事の無い不思議な氷柱が御神体として祀られている。

ある日町の風習で一人神社の掃除をしていた氷河が好奇心で氷柱に触れた瞬間、氷柱が溶け落ち見知らぬ着物を着た少女が現れた。

少女は1000年前に氷河と夫婦の契りを交わしていた大妖怪雪女で、生まれ変わった氷河が自らの封印を解いてくれる日を待ちにしていたという。

人口僅か130人の須農町の一角に聳え立つ冬狼神社。

遡る事平安時代から続く歴史と伝統あるこの場所には決して溶解する事の無い不思議な氷柱が祀られており、未だ現代科学を以ってしてもその証明には至っていない。

西暦2012年12月12日水曜日午前4時 古風な趣を感じさせる日本家屋が軒を連ねる住宅街の一軒から1人の少年が欠伸をしながら現れた。

少年は長く伸びた黒髪から覗かせる茶色い瞳が印象的で何処か他を寄せ付けない独特な雰囲気を放つ。

彼の名は氷見野氷河、須農町の隣町にある氷室第三高校に通う高校2年生。

さて、未だ日も照っていないこの時間帯に氷河が懶々向かう先は隣町の学校でも新聞配達でも無く町外れにある冬狼神社である。須農町には独自の風習で毎朝町民が交代で冬狼神社の掃除を必ず行わなければならない。

つまり今日が彼の担当の日であり、その為に近隣の住民が眠る中1人睡魔を堪えて起床した訳だ。

「いつも思うけど、何でこの氷は溶けないんだろう?」

冬狼神社の本殿に上がり雑巾掛けをしていた氷河はふと御神体として祀られている氷柱を見上げる。

氷柱からは真白な冷気が漂い室内温度を著しく低下させており本物である事は疑いの余地も無い。

それならば何か絡繰りがあるのでないかと考へた彼は氷柱に歩み寄り触れようとする。

無論、如何なる者でさえも氷柱に触れる事は町の定で禁じられている。

「冷たつ……やっぱり本物だ……」

氷河が恐る恐る氷柱に手を触ると手が火傷したようにじんじんと痛みが増し赤く腫れ上がる。

すると突如氷柱が勢い良く冷氣を噴射し、瞬く間に辺り一面が真白な冷氣に包まれて視界が遮られた。

「取り敢えずここから出ないと…っ！」

危険を感じた氷河は手探りで出口を探そうと試みる。だが次第に真白な冷氣は薄れ、気付けば氷柱が祀られていた場所に見知らぬ少女が座っていた。

少女は透き通るような白い肌に凍て付くような真紅の瞳と水色の髪をした可憐な美少女で、風変わりな着物を身に纏っている。

「き、君は誰？」

そう言いながら氷河は引き攣つた表情をしながら後退りする。

「この一千年とても長かった…妾は其方が封印を解いてくれる日をずっと心待ちにしておつたぞ？」

少女は氷河に歩み寄り、逃げ惑う彼を強引に抱き締め大粒の涙を流す。

彼女の体は生きている者とは思えない程ひんやりと冷たく、抱き締められた氷河は凍えて身震いした。

「一千年？封印？あの、もしかして君は神様…？」

氷河は震えた声で疑問を率直に少女へ問い合わせる。

「氷河…妾の事を忘れてしまったのか？九百年前に其方と永遠に夫婦の契りを交わした霧ではないか。」

「霧？人違ひだよ、悪いけど僕は君の事知らないから。」

氷河は自らを霧と名乗る見ず知らずの少女が自分の名前を知つていた事が少し気掛かりだったが、それ以上に氷柱を壊してしまった事をどう良い訳するかで思い悩んでいた。

そんな彼の苦悩を察したのか霧は氷柱が祀られていた場所に赴き、口から冷氣を吐いて易とも容易く祀られていた氷柱と全く同等の物を生成した。

「ふふ、驚いたか？妾はこれでもかつて平安の世にその名を轟かせ

た大妖怪

雪女だからな。思いのままに氷柱を作り出す事や其方そなた

の心の声を聞く事ぐらい造作も無い。」

霧みぞれは勝ち誇おほこった顔をしながら自慢氣にそつと言つた。

「ひいっー！」、「ごめんなさいっ！」

目の前で起こつた不可思議な状況を全く飲み込めず困惑した氷河は  
霧みぞれに恐れ慄き慌てて本殿の扉を開けて逃げ出した。

その後ろ姿を黙つて眺めていた霧みぞれはくすくすと不敵な笑みを浮かべ、  
自らも後を追うように扉を開けて出て行つた。

本殿を飛び出した氷河は境内が分厚い氷の城壁に覆われて鼠一匹逃れられない光景を目の当たりにし、余りの絶望感から顔面蒼白になりその場に膝を落とす。

「ああ…あんな事しちゃつたから神様が怒つて僕に罰を下されようとしてるんだ…どうしよう…」

氷河は逃げ出す事を諦めぶつぶつと何かを囁えながら小刻みに震えて縮こまる。

しかしそうじうじうしている中に彼の背後に砂利を踏む音が近付き、やがてその音はぴたりと止んだ。

「ふふ、見つけたーっ！相変わらず氷河はかくれんばが苦手だな…さ、今度は其方が鬼の番。ゆっくり十つ数えてから妾を追い掛けるのだぞ？」

霧は後ろからそっと氷河を抱き締め耳元で優しく囁いた。

「かくれんば…？いや、僕これから学校行かなきゃいけないから…子供らしい霧の言葉に恐怖心が和らぎ、心底安堵した氷河は振り向き様にそう言った。

「ほお…其方は妾よりも学校とやらに現を抜かすと言つのだな？」  
霧は冷たい眼差しで氷河を見つめ、手の平から生成した長細く鋭利な氷柱の先端を氷河の首筋に当てる。

すると彼の首筋から一滴の血霧が滴り落ち、霧は氷柱に付着した血液を愛でるように舐め回しつっこりと微笑んだ。

「い、いえ…そんな事はございません。かくれんばでも何でも喜んでやらせて頂きます…」

半ば脅迫紛いに答えを強要された氷河は薄らと目に涙を溜め愛想笑いをした。

「では、必ず妾を見つけるのだぞ？されば褒美を遣わすからな。

」

霧は軽快な足取りで林の向こう側へと駆けて行き、一旦足を止めて元気良く手を振った。

それを見届けた氷河は彼女に言われた通り目を瞑つてゆっくり10秒数えた後、憂鬱な気分で立ち上がり境内をぐるりと見渡す。

「はあ…これだけ広いとあの子を見つけるのにかなり時間掛かるかも。学校間に合うかな…」

冬狼神社の境内は氷河が通う高校の有に2倍近くの面積で子供一人幾らでも隠れられる場所がある為、彼がたった一人で霧を見つけるのは砂漠に埋もれた針を探し出すように困難だった。

「ん? 何か向こうから変な音が聞こえるような…」

参道を歩きながら物思いに耽っていた氷河は幣殿の方から耳障りな金属音が聞こえて来る事に気付く。

「まさかそんな事は無いと思うけど…取り敢えず行ってみよう。」

兎に角今は1分でも時間が惜しいと感じていた氷河は僅かな可能性に賭け微かな音を頼りに幣殿へ向かう。

「 むう、賽銭が少ない…この時代は不景気だな。」

一方その頃 霧は怪訝な表情で賽銭箱から盗み出した金銭を財布にしまっていた。

無論、賽銭箱は彼女の手で粉々に粉碎され跡形も無くなっている。

「はあはあ…まさかと思つて来てみればっ! とんだ罰当たりな妖怪だね君は…っ!」

幣殿まで辿り着いた氷河は息を荒げながら霧に詰め寄り、彼女の持つていた財布を取り上げた。

「あつ、こら氷河! それを返さぬか! 神として祀られたこの妾の為に奉納された賽銭をどうしようとするの勝手であるうー?」

氷河よりも圧倒的に身長が低い霧は財布を取り返そうと必死に飛び跳ねて微力を尽くす。

「ああああ、何処の世界に賽銭箱を躊躇無くぶつ壊して中身だけ取り出す神様がいるの? で、君はこのお賽銭を盗んで何をする積もりだったんだよ?」

氷河は呆れ果てた顔で霧に問い合わせた。

「えと…その…其方に褒美を遣わすとは言つたものの生憎目覚めたばかりの妾は無一文だつた事を思い出してな?それでつい魔が差してしまつたのだ。すまぬ…」

そつ言い終えた霧は何処か物哀しげな顔でしょんぼりと俯いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9113z/>

---

氷姫

2011年12月31日22時27分発行